

要 旨

本研究は社会科学習において、意見交流を取り入れ、様々な考えに気付かせることで社会的事象を広い視野でとらえさせ、多面的な思考力を高めることを目指したものである。多面的な思考力を養うために、互いの見方や考え方の違い、共通点や相互の関連などに気付かせることができるように、「話し合いボード」を使った少人数による意見交流を行った。この手立てを取ることで、児童はそれぞれの考えを視覚的にとらえ、操作活動を交えながら話し合いを行えた。その話し合いを行うことにより、児童は自分の考えを見詰め直したり深めたりすることができた。また、考えの幅も広がりが見られた。

〈キーワード〉 ①多面的な思考力 ②イメージマップ ③意見交流 ④話し合いボード

1 研究の目標

社会的な思考力を育成するために、意見を交流することを通して、考えを吟味する活動を取り入れた、社会科学習の在り方を探る。

2 目標設定の理由

今、子どもたちを取り巻く社会は少子・高齢化、国際化、情報化が加速的に進行し、それに伴って価値観や生き方の多様化など急激な変化を続けている。また、環境問題やエネルギー問題など個人の努力では解決できない問題も山積している。このように変化が激しく、問題の山積した社会を主体的に生きていくための資質や能力をいかに高めていくかが現在の教育の大きな課題だといえる。この資質や能力を高めるために、社会科として社会的事象を多面的に見て公正に判断する力を身に付けさせていくことが重要であると考ええる。

平成19年度佐賀県小・中学校学習状況調査の結果から見ると、小学校社会科では、すべての評価観点においておおむね達成していた。しかし、この変化が激しく問題の山積した社会を生きていくためには、よりよい社会を考え、公正に判断していくような社会的な思考力を伸ばしていくことが、今後ますます必要であると考ええる。

社会的な思考力について北らは、「社会事象について問題意識をもち、学習の見通しをもって追求すること、そして、その過程で社会的事象の特色や相互の関連、意味や働きなどについて考え、適切に判断する力」¹⁾と述べている。この社会的な思考力を育成するために、本研究では、小集団での話し合い、意見の交流を取り入れたいと考える。讃岐らは、「小集団学習を行うことによって、相互に各自の考え方や意見を確認したり足りないところを補充し合ったり、あるいは考え方や意見の対立を契機にしてより高い考え方や意見を生み出していく」²⁾と述べている。つまり、児童は他者との意見交流することにより、広い視野で物事をとらえられるようになる。また、そこから考えを吟味させ、新たに考えを再構築させることにより、社会的な思考力が育成されるのではないかと考える。

そこで、本研究ではグループの研究課題を受け、思考力を育成するために意見を交流させることで、児童が考えを吟味し、社会的事象を多面的に考える社会科学習の在り方を探りたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

他者との意見を交流する場面で、互いの考えが見えるような手立てを取ることで、他者と自分

の考えを比較させたり互いに検討させたりすれば、より広い視野で物事をとらえられるようになり、多面的に思考する力が育つであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 社会科における多面的な思考力を高める指導について、文献に基づいた理論研究を行い、研究の構想を立てる。
- (2) 所属校の第4学年における単元「そのごみどうするの」「県のように、どうなっているの」について授業実践を行い、仮説について検証する。
- (3) 話し合い活動に対する児童の意識についてアンケートを実施し、分析する。

5 研究の実際

- (1) 文献による理論研究と研究の構想

ア 多面的な思考力の育成についての理論研究

変化が激しく問題の山積した社会を生きていくためには、社会的な思考力や公正に判断していく力を育成させる必要がある。小学校社会科では、「社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすること」³⁾が求められており、社会的な思考力や公正に判断していく力を育成させるためには、社会的な見方や考え方を養い、社会的な事象を多面的に考えることが必要であると述べられている。多面的な思考力とは一面的な自分の考えに固執したり、相手の考えをうのみにしたりするのではなく、集団で学習する中で様々な考えがあることに気付き、様々な角度から思考し、互いに練り合うことで偏らない自分なりの考えをもつことである。安野は、「友だちとの対話を通して、Aさんの知識（情報）とBさんの知識（情報）を関係付ける思考操作が行われます。比べたり・つなげたり・まとめたりして、両者の関係の意味を考えるのです。」⁴⁾と述べている。また、「対話の仕組み方を工夫すれば、子どもが学習対象を多面的にとらえる、あるいは一見違うと思われることが実は同じ意味をもっているという発見をするなど深まりのある学習が期待できる」⁵⁾と述べている。このようなことから、この多面的な思考力を育成させるためには、話し合い活動が有効であると考えられる。さらに、その中で、互いの考えを出し合えるような話し合いの場を工夫したり互いの考えが目に見えるような手立てを取ったりする。そこで、自分の考えと比較させたり互いに検討させたりすれば、児童はより広い視野で物事をとらえられるようになり、多面的な思考力が育成されると考える。

イ 研究の構想

児童に多面的な思考力を育成するために、話し合いを活性化させる必要がある。そのためには、まず、児童に自分の考えをもたせ、その上で話し合いを活性化させるような手立てを取る必要がある。そこで以下のような、2つの手立てを取ることとした。

1つ目は、イメージマップの作成を行わせる。イメージマップとは、社会問題について自分が考えたことを連鎖的に書き込ませることで考えを蓄積させ、視覚的に思考の過程をとらえさせるものである。このイメージマップを作成させることで、児童自身は自分の考えが目に見える

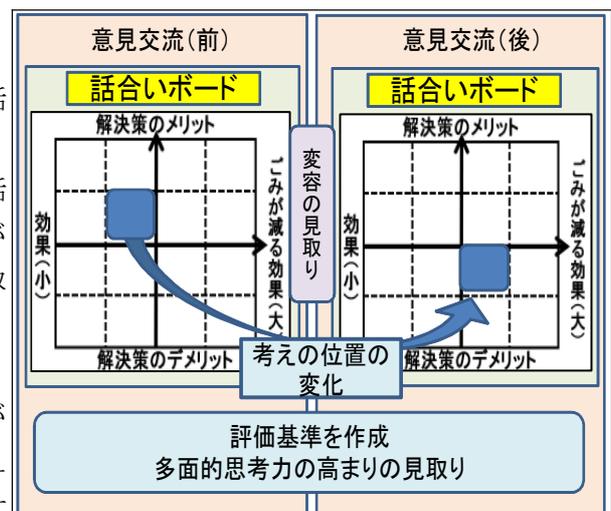


図1 話し合いボードによる思考の変容を見取る方法

ようになる。また、自分の考えを児童にもたせたり広げさせたりすることに効果的であると考えられる。このイメージマップは話し合いの前後に書かせ、そのイメージマップを比べ、児童の考えが話し合いを通してどのように広がったかを検証する。

2つ目は、「話し合いボード」を使った意見交流を行う（前頁図1）。この「話し合いボード」とは、社会的問題について自分はどのように考えているかを個人カードを用いてボード上で表すことができたり、グループカードを操作し、グループとしての考えをまとめ、その考えを自分の考えに生かしたりすることができるようにしたものである。また、自分の考えを支える理由を付せんに示し、ボード上で比較したり分類したりしていろいろな考えに気付かせるものである。意見交流では、まず、互いの考えの位置や自分の考えを支える理由を出し合わせた後、「話し合いボード」上で付せんに書いたそれぞれの考えを支える理由を比べさせたり友達の理由を聞かせたりしながら自分の考えを見詰め直させる。「話し合いボード」を使った意見交流をさせることで、児童はそれぞれの考えが目に見えるようになり、いろいろな考えがあることに気付くことができるようになる。この「話し合いボード」において、児童が自分の考えの位置の変化やその理由を基に、自分の考えを見直したり整理したりすることができるかを検証する。「話し合いボード」上での考えの位置の変化や考えの位置が変わらなかった理由を文章で記述させ、多面的な思考力の高まりを検証する。どちらも、理由として挙げる数の多さで多面的に思考する力が付いたかを検証する。また、どのような視点で考えているかなど、その内容も加味して検証していく。

(2) 検証授業①（平成20年11月実施）

ア 単元名 第4学年「そのごみ、どうするの」

イ 授業実践の概略

ごみの処理にかかわる現状から、社会的問題を理解させる。そして、ごみを減らすための解決策を考えさせ、意見交流を行う中で解決策が有効であるかを吟味し、考えを見詰め直させていく。

ウ イメージマップによる思考の視覚化

(ア) イメージマップによる思考の広がり

図2は児童が記入したイメージマップである。ごみの現状やその処理に関する学習後に、ごみを減らすためにどのような方法があるのか、また、そのよさはどのようなことがあるのか、イメージマップを作成させた。児童は、家庭から出るごみの量が多いことや、そのごみの中でビニールごみの量が多いことに気付いた。そのことをイメージマップに示し、それらを減らすための解決策を考えた。このイメージマップでは、解決策を考えさせることには有効であったが、児童一人一人を見ると、考えを広げるに関しては十分ではなかった。しかし、話し合い後のイメージマップを見ると、意見交流からいろいろなことを児童は知り、より多くの方法を考えたり、考えと考えをつなげたりと思考の広がりや考えの整理をすることができているのが分かった。このようなことから、児童は、多くの情報を知ったりごみ問題を実生活と結び付けて考えたりしながら意見交流をすることで、多面的に思考することができるようになったといえる。

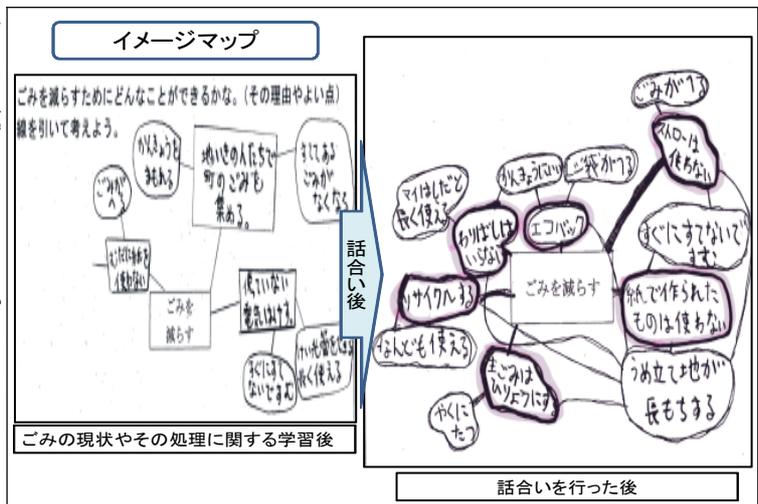


図2 児童が記入したイメージマップ

このイメージマップでは、解決策を考えさせることには有効であったが、児童一人一人を見ると、考えを広げるに関しては十分ではなかった。しかし、話し合い後のイメージマップを見ると、意見交流からいろいろなことを児童は知り、より多くの方法を考えたり、考えと考えをつなげたりと思考の広がりや考えの整理をすることができているのが分かった。このようなことから、児童は、多くの情報を知ったりごみ問題を実生活と結び付けて考えたりしながら意見交流をすることで、多面的に思考することができるようになったといえる。

(イ) イメージマップでの多面的思考の見取り

表1はイメージマップに記述した数の変化を表したものである。クラスの9割以上の児童が話し合い後には、ごみを減らすためにできることやそのよきの数が増えていた。このことから、話し合いで出た意見を児童は生かして自分の考えに加え、多面的な思考力が身に付いていることがいえる。

表1 イメージマップに記述した数の変化

	人数 (%)
増加	29人 (94%)
変化なし	2人 (6%)

エ 話し合いボードを使った意見交流の活性化

(ア) 意見交流の実際

児童は、イメージマップからごみを減らすための解決策を考え、それらの中から解決策を2つに絞った。児童が絞った解決策は、「レジ袋を有料にしよう」と「ごみ袋の値段をあげよう」の2つである。この2つの解決策にそれぞれどの程度ごみを減らす効果があるのか、また、解決策を実行した場合にどのようなメリットやデメリットが発生するかについて調べ活動を行わせた。そして、調べて分かった事実やそこから考えられることを児童それぞれが付せんに記入した後、少人数グループによる意見交流を行った。グループは、いろいろな考えを知ることができるように違う判断を選んだ者同士で編成した。この意見交流の場では、付せんに記入した考えの基となる理由を一人一人に発表させた後、グループカードをボード上で操作させた。児童は、付せんに書かれている意見をまとめたり比較したりしながら、進んで話し合うことができていた。また、児童はカードを操作するときに、自分の考えを伝え、友達のを聞くという考えをつなぐ活動を自然に行った。

(イ) 意見交流から思考の変容や高まりの見取り

評価基準(図3)を作成し、それを基に評価を行った。表2がその結果である。表2を見ると児童Aの思考の伸びが大きかった。そこで、児童Aの思考の

- a 条件を考慮し、それぞれの観点で2つ以上理由を述べている。
 - b 条件を考慮し、それぞれの観点で理由を述べている。
 - c 条件を考慮した理由なし、または、1つの観点だけの理由がある。
- 条件 解決策を実行すれば、どの程度ごみが減る効果があるか。
 解決策を実行した場合にどのようなメリット・デメリットが発生するか。
 観点 ごみが減る効果、解決策を実行した場合に発生するメリットとデメリット

図3 多面的思考に関する評価基準

変容から思考の高まりを例として挙げる。

表2 検証授業①での話し合い1回目と話し合い2回目の多面的思考に関する評価

話し合い	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	A	4	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
前	b	c	c	c	b	a	c	a	b	b	b	c	c	c	a	a	c	b	b	a	b	b	b	b	a	c	b	c	b	b		
後	b	b	b	b	a	a	b	a	a	b	a	b	b	c	b	a	a	b	b	b	a	b	b	a	a	a	a	b	c	a		
話し合い	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	A	4	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
前	a	c	b	c	a	a	a	b	a	b	b	b	b	b	b	c	a	a	c	a	b	a	c	b	a	b	b	c	a			
後	a	b	a	b	a	a	a	a	a	b	a	b	a	a	b	b	a	a	a	b	a	a	c	a	a	b	a	a	b	a		

図4は、抽出児童Aの思

考の変容を表したものである。初めは、レジ袋を有料にすることでマイバックをもつ人が増えると児童Aは考えていた。しかし、話し合い後では、「今あるレジ袋は、ごみになる」や「レジ袋を有料にすると店のお客が減る」「レジ袋を作っている会社が困る」という友達から聞いた意見を参考に、児童Aは考えを変更していた。児童A以外の約9割の児童が初めの考えの位置から変化していた。これは、話し合いを行わせた結果、互いの考えを比較させたり共通点や相違点を見付けさせたりして、新たな事実や考えの違いに気付かせることができたからと考える。そのことから、どの意見が自分には大事であるかを児童は検討し、自分の考えを

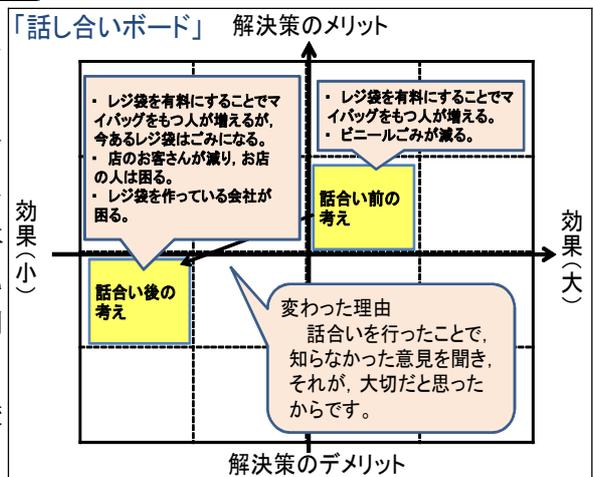


図4 児童Aの思考の変容

見詰め直すという多面的な思考を行ったのではないかと考える。

(ウ) 判断理由の数や内容の変化

表3は、児童がワークシートに記入した判断理由の数の変化を表したものである。話し合い1回目では、7割の児童が、話し合い2回目では、9割の児童が、意見交流の前後で判断理由の数が増えている。

表3 判断理由の数の変化

	話し合い1回目	話し合い2回目
増加	24人 (74%)	28人 (90%)
変化なし	7人 (26%)	3人 (10%)

- a 解決策の有効性についてデータを基に考えを示している。
- b 解決策の有効性について予想を基に考えを示している。
- c 解決策の有効性だけを示している。または、有効性を示していない。

図5 内容に関する評価基準

また、内容面についても評価基準を作成し評価を行った。内容面についての評価基準は、図5である。この評価基準に照らし合わせて

評価を行い、話し合い前後の変容を表した(図6, 図7)。この図6, 図7を見てみると話し合いの前後では、評価aが増え、評価cが減っている。これにより、児童は意見交流を行うことで、自分が知り得なかった事実や自分と違う考えがあることに気づき、また、多くの情報の中からどの情報が大事であるかを吟味して考えを導き出しているといえる。

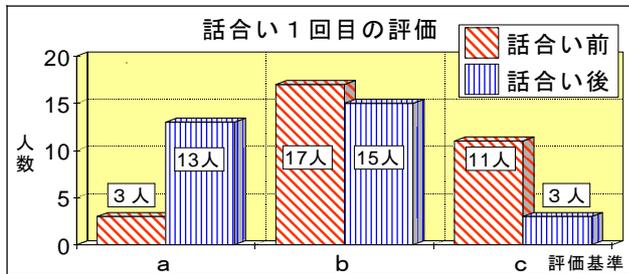


図6 話し合い1回目の内容評価に関する変容

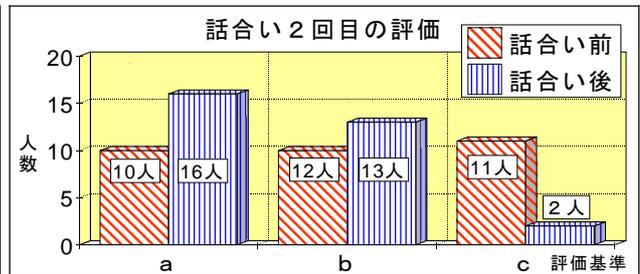


図7 話し合い2回目の内容評価に関する変容

(3) 検証授業② (平成21年1月実施)

ア 単元名 第4学年「佐賀県のように、どうなっているの」

イ 授業実践の概略

佐賀県の魅力を考えさせた後、佐賀県の4つの地域(北部・中部・東部・南部)の中で、2つの地域を選び、どちらの地域を重点地域として観光を盛り上げていくかを選択させるための話し合いを行わせた。

ウ イメージマップによる思考の視覚化

(ア) イメージマップによる思考の広がり

図8は児童が書いたイメージマップである。導入段階で、佐賀県の観光客数の現状を紹介したり他県と比べたりして、佐賀県には魅力がないのか問い掛けた。そこで、イメージマップに佐賀県がもつ魅力について知っていることを書かせたところ、既存の知識を用いてある程度の量を記述することはできたが、県全体にわたる記述は少なく、自分が住んでいる地域のことが多かった。しかし、話し合い後のイメージマップでは、意見交流において知らなかった事実を児童は知ることができ、佐賀県全体の魅力を取り上げて記述することができていた。



図8 児童が記入したイメージマップ

(イ) イメージマップでの多面的思考の見取り

次頁表4は、意見交流の前後で、イメージマップに書いた事柄が増えた児童の数と割合を表

したものである。この表4から分かるように、学級の9割以上の児童が、佐賀県の魅力を話し合い前より多く挙げることができていた。また、全児童が佐賀県の魅力について県全体から挙げる事ができた。このことから、児童は意見交流を行うことで、自分が知らなかった意見を自分のものにし、多面的に考えるための基礎的な情報を増やしているということが分かる。

表4 イメージマップに記述した数の変化

	事柄数	地域数
増加	29人 (97%)	30人 (100%)
変化なし	1人 (3%)	0人 (0%)

エ 話し合いボードを使った意見交流の活性化

(ア) 意見交流の実際

佐賀県の4つの地域から2つを選ばせた。さらに、その2つの地域を比べさせるために2つの視点(見所・特産物)をもたせ、どちらの地域が魅力があるかを考えさせた。そして、その地域の魅力を他の児童にも分かりやすいように付せんに書かせた。話し合いでは、付せんに書いたその地域の魅力を児童は紹介し、どの程度魅力があるのかをボード上に表記した。その後、互いの意見を交えながら、グループカードを児童は操作しグループとしての考えをまとめていった(写真1)。



写真1 意見交流の様子

検証授業①で使用した話し合いボードには、ボード上でどの位置にするかという児童の考えを判断する基準がなく、少し戸惑いが見られるという課題があった。そこで、今回のボードには、それぞれの枠に基準を設けた。そうすることで、基準を基に児童は話し合いを進め、自分の考えをボード上に示しやすくなり、グループでの意見交流をスムーズに行うことができた。

このグループでの話し合いの後、出てきた意見を参考に、再度自分の考えの見詰め直しを行わせた。児童は意見交流を行うことで、2つの地域のよさを出し合い、進んで話し合うことができていた。

a	条件を考慮し、それぞれの観点で2つ以上理由を述べている。
b	条件を考慮し、それぞれの観点で理由を述べている。
c	条件を考慮した理由なし又は、1つの観点だけの理由がある。
条件	佐賀県の魅力を伝えること
観点	見所(場所と説明)(祭りと内容)(自然とよさ)
	特産物(特産品や土産品のよさ)

図9 多面的思考に関する評価基準

(イ) 意見交流から思考の変容や高まりの見取り

評価基準

表5 検証授業②での多面的思考に関する評価

(図9)を基に評価を

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	B	27	28	29	30	31
前	a	c	b	a	c	a	b	a	休	b	c	b	b	c	b	b	c	c	c	b	a	c	b	b	a	c	b	b	b	c	b
後	a	a	b	a	b	a	a	a	休	b	b	b	a	c	a	a	b	b	b	a	a	c	b	a	a	a	b	b	b	b	a

行った。表5がその結果である。表5を見ると児童Bの思考の伸びが大きかった。そこで、児童Bの思考の変容から思考の高まりを例として挙げる。図10は、抽出児童Bの思考の変容をボード上で表したものである。話し合い前では自分が住んでいる南部地域のイベントを児童Bは取り上げ、そのよさだけで南部地域に魅力があると判断していた。しかし、話し

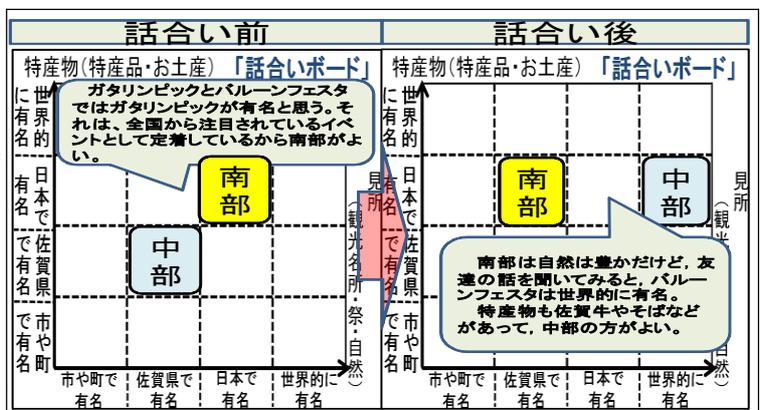


図10 児童Bの思考の変容

後には、中部地域のバルーンフェスタが世界的にも有名という意見や自分が知らなかった特産物を聞くことで、児童Bは中部地域に魅力があると考えが変化している。

このように、意見交流を行わせることで、児童Bは自分が知らなかった事実に気付いたり自分と違う考えを聞いたりしながら、佐賀県の魅力を多面的に見て、考えを見詰め直している。

(ウ) 判断理由の数や内容の変化

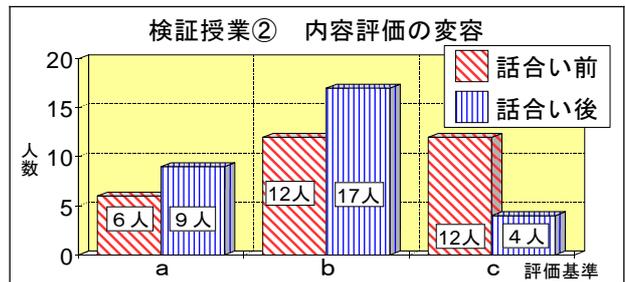
2つの地域を比べてどちらの地域が魅力があるのか、また、なぜそのように考えたのかをワークシートに記入させた。表6は、考えの基となる判断理由の数の変化を表したものである。表6を見ると話し合い後には、理由の数が増えた児童が9割を超えていた。

表6 判断理由の数の変化

	人数 (%)
増加	28人 (93%)
変化なし	2人 (7%)

また、児童のワークシートの記述内容について、検証授業①ではデータを基に自分の考えを示しているかで評価を行ったが、検証授業②では、2つの地域を比べて魅力を記述しているかを内容の評価基準(図11)とし、話し合いを行わせた。さらに、図11の評価基準を基に変容の分析を行った(図12)。話し合い前では、12人の児童が片方の地域の見所や特産物だけでどちらの地域が魅力があるかを判断していたが、児童が意見交流を行うことで見所や特産物のよさを記入したり2つの地域を

- 図11 内容に関する評価基準
- a 2つの地域の情報を比べながら判断し、地域の魅力を記述している。
 - b 1つの地域の情報から判断し、地域の魅力を記述している。
 - c 1つの地域の情報だけで判断している。または、地域の魅力を記述していない。

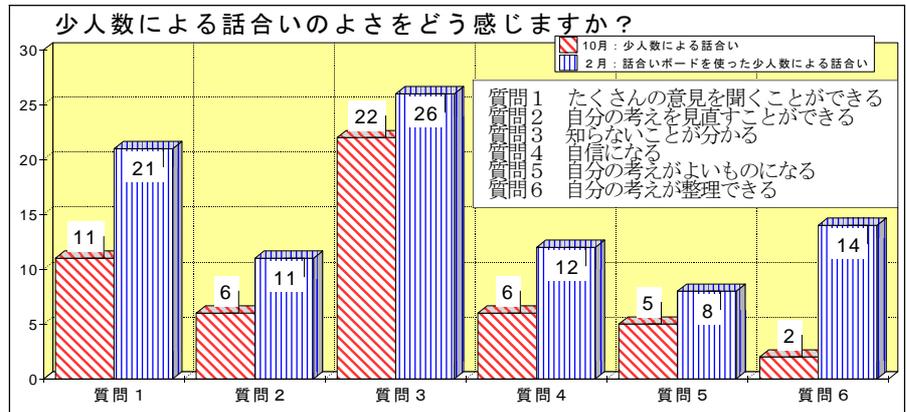


比べたりして判断している児童が増えた。これは、自分と違う理由を挙げた考えを児童が参考にしたり意見交流で出た事柄のよさを取り入れたりして、自分の考えを見直し考えをまとめることができたからだといえる。また、aやb評価のままであった児童も、記述内容を分析すると、考えの視点が広がったり理由の数が増したりと思考の深まりが見られた。

(4) 話し合いボードを使った少人数での話し合いのよさ

ア アンケート調査の結果

本学級の児童は、少人数での話し合いを行うことに関しては興味・関心が高い。しかし、自分の意見は述べるが、話し合ったことを参考にして自分の考えを広げたり深めたりすることができないという課題があった。そこで、話し合いボードを使った意見交流にどのような効果があるかを知るための意識調査を行った(図13)。10月の段階では、話し合いのよさを「知らないことが分かる」や「たくさんの意見を聞くことができる」と考えていた児童が多く、話し合いで出た意見を取り入れられると思っている児童が少なかった。このことから、話し合いのよさを感じさせたり生かさせたりすることに課題があることが分かった。話し合いボードを使った意見交流を3度行った後の2月の段階では、10月と同じく「知らないことが分かる」や「たくさんの意見を聞くことができる」という意見は多かったが、それ以外の部分も伸びている。特に、「自分の考えが整理できる」は、大幅な伸びが見られた。話し合いボードを使った意見交流において、付せんを使わせたりグループカードを操作させたりし



で、話し合いボードを使った意見交流にどのような効果があるかを知るための意識調査を行った(図13)。10月の段階では、話し合いのよさを「知らないことが分かる」や「たくさんの意見を聞くことができる」と考えていた児童が多く、話し合いで出た意見を取り入れられると思っている児童が少なかった。このことから、話し合いのよさを感じさせたり生かさせたりすることに課題があることが分かった。話し合いボードを使った意見交流を3度行った後の2月の段階では、10月と同じく「知らないことが分かる」や「たくさんの意見を聞くことができる」という意見は多かったが、それ以外の部分も伸びている。特に、「自分の考えが整理できる」は、大幅な伸びが見られた。話し合いボードを使った意見交流において、付せんを使わせたりグループカードを操作させたりし

たことで、児童は知らない事実や違う考えに気付くことができた。また、この手立てを取ることで、児童にそれらを活用させて、自分の考えを見詰め直すことよさを感じ取らせたり考えがよくなっているのを実感させたりすることができたといえる。

イ 児童の話合いボードについての感想

児童の話合いボードに関する感想（図14）を見ると、付せんを使わせたりグループカードを操作させたりすることで、児童は、それらを話合いに有効に活用することができていた。このように、意見

話合いボードについて児童の記述

- ボードを使って、一人一人がカードを動かすことでみんなの考えていることが分かった。
- 付せんを張ることで、人の考えが見えて忘れることがなかった。また、比べるのに役に立った。
- カードを動かしたり友達のを聞いてたりして、自分の考えが広がった。

図14 話合いボードに関する感想

交流を行う際に考えを目に見えるような手立てを取ることや互いの考えを比べさせながらグループカードを操作させることができる場を設けることで、児童は進んで意見交流ができ、物事を広い視野からとらえ多面的に思考することができた。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 児童に何を考えさせるのか、その視点を示し、社会的事象に対する考えをイメージマップに書き込ませたり考えを線で結ばせたりすることで、児童に自分の考えをもたせることができた。また、話合い後にも同様のイメージマップを再度書かせることで、児童自身に考えが広がったのを実感させ、自信につなげることができた。

イ 少人数でグループカードを操作させながら意見交流を行わせることで、それまでに考えなかった意見に気付かせたり違う意見を聞かせたりすることができ、自分の考えを再構成させるのに役に立った。また、社会的事象を多面的に見て、考えさせることができた。

ウ 話合いボードの中に自分の考えを示させることで、児童に互いの考えの違いに気付かせることができた。また、考えを書いた付せんを話合いボードに張らせることで、他の児童の考えを聞かせるだけでなく互いの考えを見ながら意見交流を行わせることができた。このことで、児童に多面的な思考力を身に付けさせることができた。

(2) 今後の課題

ア 児童が記述した文章を分析し、多面的な思考力の評価を行った。児童が記述している事柄の数については客観的に評価をすることができるが、内容についての評価には、十分に客観性があるとはいえない。今後、評価の在り方について更に研究する必要がある。

イ 意見を交流するには、基礎的な知識が必要である。その基礎的な知識を習得できる単元計画の工夫が必要である。

《引用文献》

- 1) 北 俊夫・安野 功 『小学校社会科 基礎・基本と学習指導の実際－計画・実践・評価のポイント－』 2002年 東洋館出版社 p. 72
- 2) 讃岐 幸治・愛媛集団学習研究会編著 『個を生かす授業をめざして－9つの実践的手法』 昭和62年 黎明書房 p. 16
- 3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 社会科編』 東洋館出版社 平成20年8月 p. 12
- 4) 5) 安野 功 『社会科授業が対話型になっていますか』 明治図書 2005年 p. 17, p. 66